

大通公園を望む窓辺から

新年にあたり思ったこと

常任理事 目黒 順一

激動の2015年が終わり、新年が明けた。大きな災害、異常気象、殺人事件やパリをはじめとするテロの発生など、世の中が大きく変化してきたことをこの年ほど感じた事はなかった（2011年の東日本大震災の年は別として）。日本でも集団的自衛権の行使と安保法制が可決され、国の形が変化しようとしている（もちろん、医療体制も）。

一方で、わが国でもアメリカと同様、所得の格差が大きく拡大しつつある。一億総中流社会と言われて来た日本であるが、今は昔となった。非正規社員が大幅に増加し、中でも若者の低所得化から結婚できないと考える階層が増加しているという。少子化に一層の拍車がかかる懸念がある。

そんな変化の中で私が特に気になったのは、子どもの貧困率（貧困率とは、世帯収入から国民一人ひとりの所得を試算して順番に並べたとき、真ん中の人所得の半分－貧困線－に届かない人の割合。子どもの貧困率は、18歳未満でこの貧困線を下回る人の割合）である。2014年発表の統計によると2012年のそれは16.3%で、過去最悪になったという。すなわち6人に1人が該当するということである。さらにひとり親の家庭に限ると5割を超すという。中でも母子家庭は平均年収も223万円（2010年）であり、父子家庭の380万円（同）を大きく下回る。その結果、日々の食事にも事欠く事態も起きている。朝日新聞DIGITALの記事では、空腹のあまりに母に隠れてティッシュペーパーを食べた幼い姉妹の話（「ティッシュって甘いんだよ」）が載っていて、心が痛んだ。好きなスポーツや進学さえも断念せざるを得ないという。子どもの頃の夢は、将来への希望でもある。なんでも所得により決まる世の中はいかがなものだろうか。

私一人では何もできそうもないが、せめてこうした事例に対してしっかり受け止める心（感性）を持ち続けたいと思っている。

スーパーおおぞら3号

理事 稲葉 秀一

札幌8時51分発スーパーおおぞら3号、理事会の翌日、帯広に帰る時にいつもお世話になる列車です。理事会の後は、かれこれ40年以上通っている北24条にある焼き鳥「T」で、学生時代にタイムスリップした気分でした。こたま飲み、二日酔いの頭で列車に揺られて帰るのがいつもです。

ひとつの二次医療圏としての十勝には、19市町村約36万人が生活しており、2つの医師会（帯広市医師会と18町村を束ねる十勝医師会）があります。交通網の整備が進んだことと多様化したニーズもあり、複数の医療機関に通院する患者さんが多く、市町村の垣根を越え、さらには医療圏をも越えているのが実情です。このような中、地域の実情を反映した在宅医療・救急医療・災害医療そして地域医療構想等に取り組むには、医師会の垣根はもとより行政の垣根を越えた協力体制が不可欠です。

両医師会会員の地域医療の充実にかける思いは高く、内科・小児科系の休日の一次救急医療体制は、両医師会の先生が帯広市休日夜間急病センターに出向して診療する体制です。すでに運用されています。災害時の救急医療体制については、二次救急を担う医療機関間で協議が始まっていますし、災害時の透析患者診療体制についても、透析医療機関が中心となり具体的構築に向けて動いています。

私達のような郡市医師会は、地域の医療を充実させ発展させていくための医療政策の専門家集団としての役割が大きく、会員からの多くの意見を集約して、いかにして行政に反映させていけるかが大切だと思っています。そのためにも、これまで以上に会員相互が忌憚のない意見を交わすことができる医師会に成長して行かなければ・・・。

うつらうつらしていたら、そろそろ帯広に着く時間になりました。

